

われわれが暮らしている国土の地理的条件・自然条件については、われわれは十分に理解しているつもりである。しかし、日本の国土だけを対象に勉強したのでは、理解していることにはならない。

わが国が経済的に競争しているヨーロッパの中心部やあるいは北アメリカ・中国の中原部あたりとの比較の中で、わが国の国土条件の特徴を列記してみると、彼らにはないいくつかの厳しい自然条件がわれわれに与えられているということがわかる。

今号の「日本人を育んだ国土の地理的条件・自然条件」シリーズ第3回は、わが国の平野が狭く少ないことがテーマである。

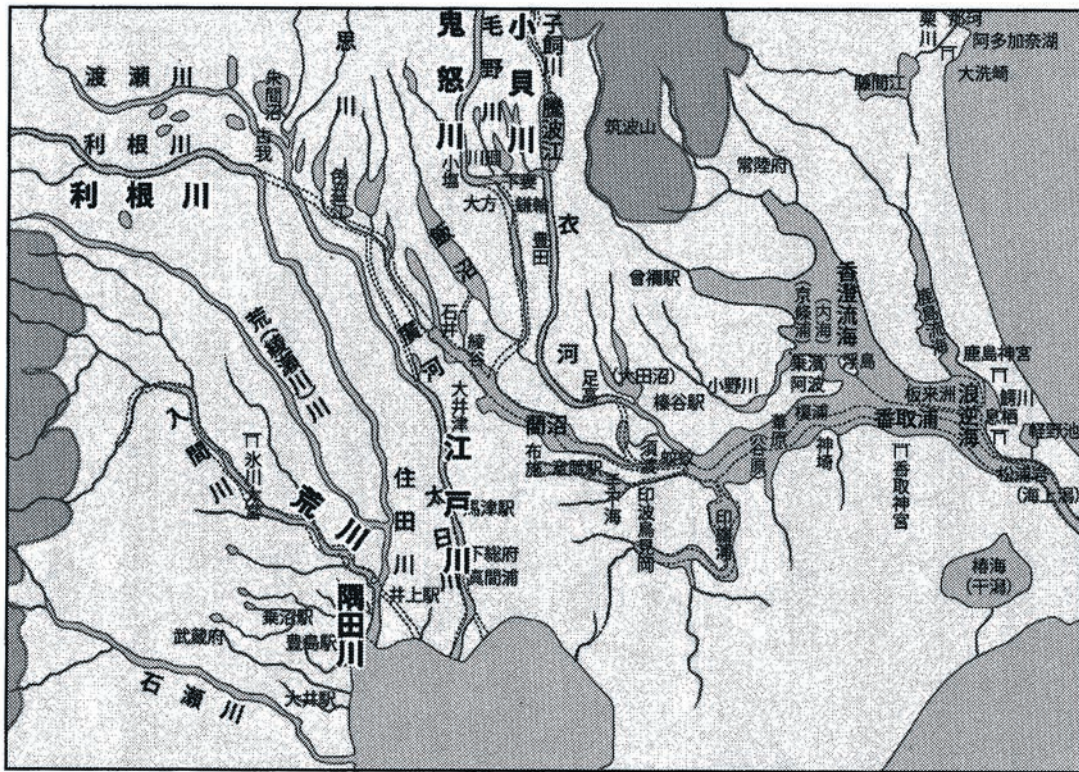
国土面積の27%

標高が500m以下で傾斜していないとか、あるいは沼沢地でないなどの条件を満たす土地を可住地という。わが国は山岳地が広いため、可住地は国土面積の27%程度しかない。可住地がイギリスでは85%、ドイツでは67%、フランスでは73%もあることを考えると、この可住地比率の小ささはそれだけでも厳しいハンディとなっている。

農地にしたり、都市をつくらたり、工場を建てたりといった近代的な土地利用は、可住地でないとほとんど行えないが、そういったことが可能になる土地がこれだけ少ないのである。

河川改修で利用地を拡大

図1 利根川改修以前の関東平野



出典：千葉の自然誌本編1：千葉の自然 P92「図2-22 利根川・鬼怒川（約千年前）水脈想定図（吉田1910 改変）に加筆修正

全体的に少ないということもわれわれにとつて大きな不利条件であるが、さらに大きなハンディとなっているのは、この可住地が、きわめて分散的にしか存在していないということである。平野は内陸地域では盆地として、また海岸地域では、河川が押し出してきた河口部の土砂の上しかないのである。

江戸時代に河川改修

図1は、江戸時代以降に河

川改修を行つて河川の流路を固定する前の関東平野の様子を示したものである。今の人は、日本は平野が小さく、まとまって使える土地が少ないといつても、関東平野のような大きな平野があるではないかと思ふかもしれない。しかし、関東平野がこのようにまとまって使えるようになったのは、実はそんなに昔のことではないのである。図1にあるように、昔は多くの河川が自由自在に流れており、洪水が自由に流れてきたり、各地域を水浸しにしてしまふといったような流れ方をしていた。だから関

東の中でも点的に存在する小高いところだけが、人が住んだり、耕作地に使つたりできる土地だったのである。しかし、江戸時代に入つて、利根川の流路を銚子の方に付け替える利根川東遷事業や、荒川の流路を入間川の方に替えた。さらにその後の努力により、河川の流路を固定することといった整備がなされたことである。今日のようにまとまって使える関東平野になっているのである。

流れるようにしないと、人間が使える土地など生まれないのである。今、関東平野をほぼ一体的に使うことができるのは、私たち日本人の長年にわたる努力の成果だということを、よく認識しておく必要がある。そして、このようなまとまった使い方ができるようにしたのは、歴史の長い時間であれば、比較的最近のことなのである。

このように、河川改修の第一歩は、流路の固定である。流路の固定がなければ、農地にするにしろ、都市を建設するにしろ、計画的な土地利用ができるわけもない。しかし、流路の固定はきわめて困難な作業であった。

木曾三川の治水

中部地方には「木曾三川」といわれる河川（揖斐川・長良川・木曾川）がある。これらの河川は、岐阜県海津市あたりできわめて近接して流れており、昔はそれぞれの河川で洪水があるたびに、流路をまたがって流れたため、一流域で大雨が降ると、それが全下流域に及ぶといった被害がたびたび発生した。

江戸幕府はそこで、この三川の近接部をきちんと分流することにし、木曾川は木曾川の流路、長良川は長良川の流路、揖斐川は揖斐川の流路に

流路の固定の歴史

国土が日本人の謎を解く

本書は、わが国の地理的条件・自然条件だけでなく、われわれ日本人は何を経験し、何を体験しなかったのか？



それはヨーロッパやアメリカ、中国の人々どう異なっているのか？ について学ぶことの出来る好著。発行：産経新聞出版 定価：1300円＋税

大石久和著